剰余価値と搾取の秘密を学ぶ

　はじめに

不破哲三さんが「マルクスは生きている」（平凡社新書）の中で「資本家は別にインチキをしているわけではない。‥世間並みの生活ができるだけの賃金を支払ったとしても、資本家は市場経済の法則にしたがって、まちがいなく剰余価値を手に入れることができる」といい、そこに資本主義の搾取の秘密があるといいます。私の眼目は剰余価値のつくられ方を追体験することです。

マルクスは、資本家と労働者のあとについて「生産という秘められた場所に、〝無用の者立ち入るべからず〟と入口に掲示してあるその場所にはいっていこう」と軽妙に誘います。（②p.306、新版『資本論』第2分冊、ページ306の意味。ゴシックは『資本論』から）

剰余[[1]](#footnote-1)価値の定義は「100ポンドで買われた綿花が、例えば100プラス10ポンド、すなわち110ポンドでふたたび売られる。だから、この過程の完全な形態はＧ(貨幣) －Ｗ（商品）－Ｇ´（貨幣）であり、このＧ´は、Ｇ＋△Ｇ、すなわち最初に前貸しされた貨幣額プラスある増加分に等しい。この増加分、または最初の価値を超える超過分を、私は剰余価値（surplus value）と名づける。」（②p.262）です。

剰余価値がつくられる過程

マルクスは剰余価値のつくられ方を紡績工が綿花から糸を紡ぐ生産過程を例に説明しています。資本家は生産をはじめるに先だち、生産手段（綿花、紡錘機）と労働力を商品として買い揃えます。資本[[2]](#footnote-2)の「投資」ですが、マルクスは「前貸し」といいます。商品は価値[[3]](#footnote-3)と使用価値の統一物です。価値は目には見えません[[4]](#footnote-4)。価値の大きさは、商品に凝固している労働時間の長さではかることができます。そして労働時間は一定の金量すなわち貨幣額[[5]](#footnote-5)で表すことができます。

以上の前提に立ち、マルクスは価値をはかるために、ある仮定をおきます。

（1）労働力の再生産には半労働日[[6]](#footnote-6)（6労働時間）が必要である。したがって1労働日は12労働時間です。

（2）労働日の日価値（6労働時間）は3シリングとする。したがって、2労働時間が1シリングです。

（1）「前貸し」商品の価値を計算する

いま、資本家は１日のうち、6時間だけ労働力を消費するものとします。なお、価値を「時間」と「シリング（貨幣）」で表しているのは、「価値は労働時間の凝固」であり、さらに「価値は価格で表せる（補注4）」ことによります。はじめに「前貸し」された商品の価値を〔図1〕に整理し、計算します。

①「糸の製造のためにはたとえば10重量ポンドの綿花が必要だった。…これ市場においてたとえば10シリングで買った…。綿花の価格のうちには、その生産のために必要な労働が一般的社会的労働として含まれている。」（②p.325）

原料綿花の価値は10シリングです。20労働時間が対象化。対象化とは綿花の生産には20労働時間が「凝固している」と同義です。(10シリング×2労働時間＝)

②「綿花の加工中の紡錘は…2シリングの価値[[7]](#footnote-7)をもつと仮定しよう。」（②p.325）

　紡錘の価値は2シリング。4労働時間を対象化しています。

（2シリング×2労働時間）

足ふみ紡錘車―紡錘＝スピンドルというのは車から紐で回転しつつ糸によりをかけて巻き取っていく部品です。（『資本論を読む』学習の友社）

③「労働力の販売のところでは、労働力の日価値は3シリングであり、この3シリングには6労働時間が体化されており‥」ます。

（②p.330）労働力の価値は3シリングです。ここでは労働者の1日の賃金が3シリングであり、それは6労働時間の価値のことです。

|  |
| --- |
| 〔図1〕　　　　　　紡績工が6労働時間働いた場合 |
|  | 「前貸し」の価値 | 糸の総価値 |
| （ｈ労働時間、sシリング、ｂポンド） | 時間 | シリング | 時間 | シリング |
| 20ｈで生産される10sの綿花10b | 20 | 10 | 24 | 12 |
| ４hで生産される2ｓの紡錘1/4個分 | 4 | 2 |
| 紡錘労働6ｈの付加価値3s | 6 | 3 | 6 | 3 |
| 30ｈで生産される15ｓの綿糸10ｂ　 | 30 | 15 | 　30 | 　　15 |

紡績工の行う労働は、一面では生産手段の価値を維持・移転しながら、他面では新たな価値を付加[[8]](#footnote-8)します。付加とは「綿花に価値をつけ加える」という意味です。

「価値をつけ加えることによって、価値を維持するということは、活動している労働力すなわち生きた労働の天性」（②p.359）原料など過去労働が凝固している労働手段に生きた労働がつけ加わると死んだ労働が生き返って、綿花の価値が維持されるだけでなく、新しい価値が生み出されていく[[9]](#footnote-9)というのです。労働の二重性は下図の模式ですが抽象的人間労働の側面が、新たな価値の付加・創造を担います。三つは同時進行です。

労働の二重性

同時に進む

労働の二面的作用

使用価値生産

具体的有用労働的有用労働

生産手段の価値移転新しい

抽象的人間労働

新しい価値の創造

〔図1〕は資本家が労働力の価値通り、6労働時間働かせた場合ですが、資本家は、30時間の価値の資本を投入して、30時間の価値の生産物を得たわけです。しかし剰余価値は生み出されていません。貨幣で価値を表わしても同じです。10ポンドの綿花は15シリングであり、綿糸を売っても15シリングだからです。

「わが、資本家はとする。」（②p.321）ことになるわけです。

（2）紡績労働が12時間に延長される

　「愕然」とした資本家は、労働者に3シリングを支払い、1日に12時間にわたり労働力を消費することにします。必要な生産手段は2倍、購買されます。

肝は、次の点です。労働力商品の使用価値として1日分の労働を行うことです。資本主義のもとでは、一般的に労働力の価値の再生産時間の６時間を超えて、マルクスの時代は12時間労働が1労働日を意味していました。現在は8時間が標準労働日です。

　〔図2〕は前述の生産条件で紡績工が12労働時間働いた場合です。

|  |
| --- |
| 〔図2〕　　　　　　　紡績工が12労働時間働いた場合 |
|  | 「前貸し」の価値 | 糸の総価値 |
| （ｈ労働時間、sシリング、ｂポンド） | 時間 | シリング | 時間 | シリング |
| 40ｈで生産される20sの綿花20b | 40 | 20 | 48 | 24 |
| 8hで生産される4ｓの紡錘1/2個分 | 8 | 4 |
| 紡錘労働12ｈの付加価値6s | 12 | **3** | 12 | 6 |
| 60ｈで生産される30ｓの綿糸20ｂ　 | 60 | 27 | 　60 | 　　30 |

資本として「前貸し」された価値は、生産過程に投入された綿花20シリング、紡錘の摩耗分4シリングと労働力商品の日価値3シリングの計27シリングです。新生産物（糸）から算出された価値は30シリングです。差額3シリングが生まれています。[[10]](#footnote-10)

「それは3シリングの剰余価値を生んだ。手品はついに成功した」（②p.338）のです。

『資本論』において有名な「6シリングの価値をつくりだす労働が、3シリングの価値をもつという一見ばかげた結論が得られる」（③p.937）のは、労働力の**価値**は6労働時間=３シリング、他方、労働力の**使用価値**は12労働時間＝６シリングという違いによるのです。

「ザックリ」いえば、資本家は賃金を労働力の価値通り、6労働時間の3シリングしか支払わず、労働者を12労働時間働かせ、6シリングの価値を得ているという「手品」なのです。労働者は6時間、タダ働きさせられているのです。

　搾取をおおい隠す賃金制度

剰余価値の生産では、労働力の価値と労働力の使用価値の違いが重要でした。剰余価値論も本来は労働力から「入るべき」なのですが、そうするといつも間延びし、剰余価値にいき着きません。今回は逆ですが、「賃金制度が搾取をおおい隠している」という視点から労働力の特質を学び、剰余価値を再確認しています。

（1）労働力には価値と使用価値がある

「労働力というのは人間の肉体、生きた人格のうちに存在していて、彼のなんらかの種類の使用価値を生産するそのたびごとに連動させる肉体的および精神的諸能力の総体の事」（②p.292）です。つまり労働能力です。剰余価値の生産では、資本家が労働力を他の生産手段とともに購買します。つまり「労働能力」を商品として買っているということです。

他方、労働者は労働力を「売っている」という意識はまったく希薄です。実は労働組合は「労働力の安売りしない」をしないための団結だということが、大事なのです。

労働力も商品である限り、価値と使用価値があります。「（労働力の価値は他の）どの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定」②p.297）されています。

労働力の価値は、生きていくに足りる、すなわち「生きた個人の生存」を維持するために必要な生活手段の価値です。「生活手段の価値」については、労働組合の「生計費原則」に通じています。

労働力の日価値は、労働者の一定の寿命にもとづいて計算され、労働者の日常生活費、家族の扶養費、教育費の費用で、年間総計の1日平均なのです。これは歴史・文化で異なり、「ある国のある時代」には、その平均範囲は与えられます。『資本論』の時代は3シリングでした。

現代日本の「時給1500円」は、労働力の価値とどのような関係になるのか、おもしろい議論のテーマです。

労働力の使用価値は、現実の労働力の消費過程ではじめて現れます。資本家が労働力の価値の大きさを超えて労働力を消費できること、つまり「価値である6労働時間」を超えて12時間働かすことが資本家にとっての使用価値なのです。

（2）労働力は「労働の価格」として現れる

マルクスは「ブルジョア社会の表面では、労働者の賃銀は、労働の価格すなわち一定分量の労働にたいして支払われる一定分量の貨幣として現れ」（③p.939）る、といいます。

労働基準法において賃金は「労働の対償」（第11条）すなわち「労働の対価」となっていてマルクスの指摘の通りです。

「賃金は貨幣で現れる」ことを疑問視する人はまずいません。したがって、議論のために「労働証券」[[11]](#footnote-11)（写真、2時間と刻印）を紹介しています。

（3）労働力の独自な本性と現象

「労働力というこの独特な商品の独自な本性」により、「労働力は売買契約で確定された期限のあいだ機能し終えたあとで、たとえば各週末に、はじめて支払を受け」（②p.303）とります。

「賃金の後払い」は労働者が労働力の価格の支払を資本家に信用貸していることです。労働者からすると労働量の使用価値を前貸しして、資本家がその価格である賃金を後払いしていることです。資本家が破産したら労働者は貸し倒れです。

「賃金確保法」ができるまで、筆者の年末は「賃金不払い」解決のためのゼネコン交渉に明け暮れていました。また、北欧調査で有給休暇の賃金が前払いされ、「旅行費用が助かる」と聞き、賃金の前払いに驚いたことがありました。

労働力が労働過程において「資本家による労働力の消費過程として行われる場合には、二つの独自な現象を示す」ことは重要です。

「第一は、資本家が管理するもとで労働する」（②p.322）つまり労働者は工場内で働くなど、始業・終業は労働時間に縛られます。

「第二は、生産物は資本家の所有物であって、直接的な生産者である労働者のものではない」（②p.322）ことです

この点でマルクスのもの言いは辛らつです。資本家が労働力の使用において、例えば「3シリングで12時間働かせる」ことは、「1日のあいだ、賃借りした馬の使用と同様に、その日1日のあいだ資本家に属している」（②p.323）のと同じだといいます。さらに、生産物が資本家に所属するのは「ワイン地下貯蔵室における発酵過程の生産物が彼に所属するのとまったく同じである」（②p.323）といいます。

これらは「使用従属」の現実を納得させます。自分の賃金分しか働かない労働者は理屈ではなく、そもそも雇われません。日頃意識していない「あたりまえ」の所以を知ることは、次への準備です。

（4）労働力の価値と貨幣での支払い

　「労働力の価値が、貨幣で表現されるなら労働の必要価格（賃金額）」が規定されます。すなわち労働力の価値は賃金額なのです。大事なのはここからです。いったん賃金が決まると、「労働日が必要労働と剰余労働に、支払い労働と不払労働とへの労働日の分割へのあらゆる痕跡を消してしまう。すべての労働が支払い労働として現れ」（③p.937）るというのです。この指摘が重要です。

　社会制度とそこで支配される者への搾取のあり方を見てみます。

例えば、奴隷は全労働時間を主人のために働いていると認識しています。100％の搾取です。

封建領主のもとの賦役労働では、「百姓」にとっては、自分のための労働と「殿様」のための労働が、時間的にも感覚的もはっきりと区別できます。例えば江戸時代の「五公五民」は50％の搾取です。

他方、資本主義のもとで労働者は、賃金制度のもとにおかれます。労働者は全労働時間の賃金が支払われているものと信じ、さらに全労働時間を自分と家族の生活のために働いているという観念（イデオロギー）に支配されています。つまり資本主義社会における賃金制度が労働者に対する搾取をすべからく見えなくしている[[12]](#footnote-12)のです。

　マルクスは「わが資本家には、彼に笑いをもたらすこのことをあらかじめからわかっていた」（②p.337）といいます。「労働力の1日のあいだの使用が創造する価値が、労働力自身の日価値の2倍の大きさであるという事情は、買い手にとっては特別な幸運であるが、決して売り手に対する不当行為ではないのである」（②p.337）といいます。

不破さんのいうように、搾取は資本主義という社会制度のもとで「公認」されているのです。

　剰余価値の生産は資本主義という労働力を商品化する特殊な歴史社会の秩序の枠内でこそ、はじめて合理的に成り立っています。労働者階級が、剰余価値と搾取という資本主義の「秘密」を認識し、「必要労働と剰余労働の全体」を真に民主的な社会関係に置き換える可能性を展望するとき、そこには社会主義のあらた地平が開けます。

以　上

佐藤塾　学習テキスト

<https://kumiaizukuri.jimdo.com>

e-mail　moiwaryo@gmail.com

　もいわ

1. 剰余は「余分」を意味します。人間には「自分の食べる分以上に他人を食べさせる分も働いている、あるいはその能力」があります。人類の数万年にわたる社会的生産能力の発展の結果です。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 資本は「貨幣形態をとったり、商品形態をとったりしながら自己増殖する」に説明を留めておきます。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 価値は、商品のうちにまぼろしのように対象化されている抽象的人間労働です。対象化とは「自分の外に存在するものになった」という意味です。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「…価値の額（ひたい）にはそれがなんであるか書かれているわけではない。」(① p.133)商品が交換されてはじめて、その中に含まれている人間労働が等しいとわかってくる。交換されなければ、人間労働がこもっていることはわからない。労働生産物（商品）は人間労働の塊りです。この発見は、後代の科学的発見、つまり労働価値説なのです。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 商品の価値の実体は労働量に正比例する価格で表せます。つまり価値と価格は一致するという前提です。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 「労働力の日々の生産のためには、半労働日が必要であると仮定する。これが労働力の日価値を形成する。半日分の社会的平均労働が3シリングの金量で表されるとすれば3シリングは労働力の日価値に相当する。」（②p.301） [↑](#footnote-ref-6)
7. 会計学でいう減価償却の価格です。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 「紡績工の労働そのものが綿花につけ加える価値部分が問題である」（②p.228）

新生産物の価値30時間は　×生産手段のもともとの価値24時間＋労働力の価値6時間＝

　　　　　　　　　　　　　 ○生産手段のもともと価値24時間＋新たな6時間労働がつく加えた価値＝

労働力の価値と労働過程での労働力の価値増殖とは二つの違う量なのです。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 不変資本（過去の労働時間としての価値実体）の価値を新たな生産物に移転するのは、紡績作業のような生きた労働が、生産手段を無駄にせず、合目的的に具体的有用労働を行うことによる。生きた労働は抽象的労働の面で（ｖ可変資本＋ｍ剰余価値）を生み出しつつ、同時に具体的有用労働の面で生産手段を、目的にそって無駄なく用いることにより、不変資本の価値を生産物に移転する。 [↑](#footnote-ref-9)
10. いい方を変えると、労働力商品の使用価値をなす1労働日の労働が、労働力の価値の実体をなす必要労働6時間をこえて、剰余労働6時間を含んでいます。剰余労働が剰余価値の源泉をなしています。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 空想的社会主義者のロバート・オウェンは「労働証券」を実際に使いました。例えば労働の結果して

「2時間」の「証券」を発行してもらい、「2時間分の物」と交換できるシステムです。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 資本主義社会における賃金闘争は、労働日全体は必要労働と剰余労働から成り立っているが、労働者は実体的には労働力の価値の必要労働部分を生活手段の拡大の形でとりもどしているにすぎません。 [↑](#footnote-ref-12)